星の王子さま

サン＝テクジュペリ作　内藤濯訳（岩波書店 2000.3）

『たいせつなことはね、目に見えないんだよ……』サハラ砂漠の真ん中に不時着した飛行士と、本当のことしか知りたがらない王子さまとのやりとりを描いた、サン＝テグジュペリ唯一の童話です。童話だからと言って、決して子ども向けではなく、「すべての子どもだった大人」のために書かれた話です。また、この本は子どもの読む童話ではない。そう言い切る人も少なくありません。私もそう考える人間の一人です。

物語の中で、王子さまはさまざまな大人の住む星を旅します。王さまやうぬぼれ男、呑み助や実業家…。どの大人も自分のことばかりを考えて、何が自分にとって本当に大事なものなのかを考えようともしません。やがて地球に着いた王子さまは、キツネやヘビ、飛行士と出会い、そのたいせつなものを見つけます。そして王子さまは、たいせつなものの待つ自分の星へと帰っていくのでした。

この本を初めて読んだのは、私が中学生の頃だったと思います。有名な本であるのは勿論のことですが、その少し不器用ともいえる絵に心惹かれたことを今でも覚えています。最後に描かれた何もない砂漠の星空。その漠然とした寂しさの裏に潜む美しさには正直、どんな言葉も必要ないようにさえ思えたくらいです。気付けばそれ以来、私はこの本を毎年一回以上は読むようになりました。

本当にたいせつなものとは何なのでしょうか?

友情、愛情、優しさ、素直さ…。毎回、多少の違いはありますが、読後には、いつもこのような言葉が浮かんできます。一見照れくさかったり、くすぐったくなったりしてしまうような言葉なばかりですが、これが正直な気持ちです。そしてそれらがどれも物質的なものではなく、「目に見えないもの」であるということに気付かされます。たくさんの辛いことも、悲しいことも経験してきた今だからこそ、純粋であることのたいせつさが分かってくるものなのかもしれません。

この作品に含まれた意味はさまざまあると思います。殺伐とした20世紀前半の大戦に思う絶望と寂しさ。しかしその中に純粋な思いが見つけられるとしたら…?　心が疲れた人、自分を見つめなおしたいと思う人に私はぜひこの本をお勧めしたいです。

（文化学部日本語・日本文化4年　伊藤彩夏）

■自著紹介■

現代地方自治の現状と課題

浅野一弘著
同文舘 2004.6

2004年9月、北海道に上陸した台風18号が、道内各地域において、大きな被害をだしたことは、われわれの記憶に新しい。そのとき登別で合宿をしていたわがゼミの面々は、悲惨な目に遭遇してしまった。これも、日頃のわたしのおこないの悪さゆえであろうか。

ところで、全国放送のニュースをみていると、台風が東京に接近するまでのあいだは、その進路に関して、詳細な情報がくりかえし提供される。しかしながら、いったん東京に青空がもどったとたん、たとえ台風が北海道内において猛威をふるっていたとしても、そのニュース・バリューは一瞬にして低下してしまう。「そんなんでええの?」－これが、本書執筆の直接の契機であった。

そこで、本書では、近年地方自治の領域でさかんに唱えられている、"TAPE"の視点を重視しつつ、地方分権改革の動向、NPOの活動、IT化の現状、地方議会のかかえる問題点、構造改革特区の課題について論じている。みずからの専攻領域が地方自治体の危機管理であるため、お恥ずかしいことに、本書での分析は全体をとおして「甘さ」ばかり散見される。それにもかかわらず、あえて本書を公刊した最大の理由は、拙著が現在進行中の三位一体の改革や市町村合併問題などを考える際の一助となれば幸甚と思ったからである。

（法学部 助教授）